

最近思うこと

二階堂 元重

開業して12年。当初手術室付き19床の有床診療所で基本設計はできあがっていたが、ある時「神の啓示」で白紙撤回し今の医院がある。敷地いっぱい建物が占有してしまい駐車場が7台しかとれなくなってしまったというのが本当の理由であるが、結果的にはこの決断は正しかったようだ。

何でも最初からそろってないと我慢できない性分で、今までもこれで随分失敗している。ゴルフだって最初からしっかりフルセットを買って練習したが結局ものになっていない。

着工直前になって方向転換したのだから周囲には結構迷惑をかけたし何より初志貫徹

できなかったくやしさが強くてそれでも手術室と2床の病室を残した。膝関節鏡器械一式を購入、数年は1泊入院で腰麻手術を行っていたが次第に尻つぼみになりいつの頃からか完全にやめてしまった。

また近くにおあつらえ向きの源泉があってここからお湯を引いて温泉運動浴槽を作った。これも当初削除対象だったがこれだけは譲れないって感じで強引に作ってしまった。好評かに見えたが意外に利用する人は少なくそのわりに手間もコストもかかった。そのうちに源泉が枯渇してしまい今はつぶして休憩スペースになっている。ろ過循環方式だがりっぱ

な温泉で結構自分自身も楽しんでた分さびしい思いをしたが、その後レジオネラ菌の問題が有名になった時は少し救われた気がした。

結局入院、手術をやめ温泉をやめたことは収支的にもプラスだった。

何と云ってもリスクが激減、体も楽だ。スタッフも喜んでいて。最初からやらなきゃよかったじゃないかという話になる。

有床診療所に逆風が吹き始めたのもこの頃で、今では敷地いっぱいに関面を引いてくれた設計士さんにカムサハムニダだ。美術館なんかを手掛ける芸大出の先生で「四角い箱なら作りませんよ。」とは言われてたもののさすがに使い勝手は二の次だった。確かに変わった仕様で面白いものになったが、一旦仕事が始まってしまうとそれどころではなく四角い箱でもよかったかなと思う。

玄関アプローチに約5mほどの鉄骨のワクがオブジェ的に取り付けられているのだが、患者さんからはしばらくの間「屋根つけるコール」が続いた。

「戸倉だよ、ラッカサン。」って感じで見切り発車的に開院することができたのも、当時長野県の誇るブランド地銀の上山田支店長が「アズユーライク。」と言ってくれたからだ。14年前は自己資金がなかろうがちゃんとした保証人がいなかろうが何も言われなかった。こうなるとイケイケでつい調子に乗ってしまう。もともと「飽き性」で熱しやすく冷めやすい。そうでなくても友人からは「開業は向いてないからやめろ。」と言われてた。

それでもがんじがらめに束縛されてしまえばあとは義務感を背負い仕事に集中するしかないわけで、病気や事故さえなければある程度やれる自信はあったし実際何とかここまで

やってこれた。試験勉強も一夜漬けだったしとにかく追い込まないとやる気が出ない。

ただ最近何となく気合が入らなくなっている。まだ「若手」なのに。

飽きてきたのだろうか。しゃべるのがつらい。聞くのもつらい。TVで伝統工芸職人の技とか見てると「この人一日しゃべらなくていいなあ。」と思う。そういえば無類のテレビっ子だったはずなのにあれほど好きだったバラエティーやトーク番組はうるさくて見なくなった。というよりCMが耳につき民放は極力見なくなった。もっぱらスポーツ・映画・ドキュメンタリー三昧だ。

話は変わるがスポーツ中継こそNHKに限る。不祥事でもやらせでもなんでもいいから絶対NHKだ。ゴルフの日本オープン（昔は関東オープンもやってた。）の格調の高さはすごい。臨場感、選手の緊張感がひしひしと伝わってくる。これはひとえにアナウンサーの語り口の賜物だ。ゴルフでは島村アナ、MLBでは森中直樹、アイホ西田、サッカー山本、相撲では古くは北出清五郎、杉山アナ。枚挙にいとまがない。よく勉強しているのは言うまでもないが共通してるのは「もの静かな語り口」だ。決して興奮しない。

彼らこそ一日中しゃべり続けてて疲れないのだろうか？ 立場こそ違え説得力は抜群だ。以前深夜WOWOWで「古館伊知郎独演会」vol.いくつというのがあるって渋谷パルコ劇場かなんかでとにかく2時間延々と台本なしにしゃべり続けるというものでこれは凄かった。起承転結がちゃんとしているのと、途中嘔むことが全くないのである。まさに「芸術」である。しかもvol.いくつときてる。内容は例えば駒沢公園ドッグランの実況中継とかタワ

イないものが主だが、その中で自分は脳内の記憶を司る扁桃体が人より大きい、自分の能力はこの為だと言ってMRI画像の比較対照を巨大スクリーンで説明してた。確かに異常に大きくて笑えた。遺伝子がどうかは知らないが何事にも「向き不向き」はあるだろう。友人の言葉が今になって心にしみる。

再来年は下の娘の大学卒業と同時に大口の〇〇が完済となる年だ。

これまで目的に向かって必死にやってきた

がひとつの節目が見えてきたところで少しバテてきたようだ。

医術は話術だ。元々向いてない人間が無理してやってきたツケが今回ってきたような気がする。まだまだ先は長い。幸い体はどこといって悪くない。

「若手医師」としては、この辺で一度初心に戻り、気合いを入れ直してみたいと思う今日この頃である。